

# 知の最先端で 母校を振り返る

東京大学東洋文化研究所准教授  
真鍋 祐子  
(昭和61年3月 教育学部卒業)

## 「研究」という私の仕事

東京大学東洋文化研究所より朝鮮研究の准教授という思いがけない打診を受け、平成18年春に着任しました。その職責は「研究」すること。学内のいづれかの大学院でゼミを最低一つ担当するほかは教壇に立つ義務がなく、非常に恵まれた研究環境です。

## 朝鮮研究を志したきっかけ

大学入学直後の昭和57年夏、中国大陸への「進出」か「侵略」かの記述をめぐって教科書問題が起こりました。ならばアジアの国々ではどんな教科書で歴史を学んでいるのだろうか？そんな教育大生ならではの好奇心から韓国語の独学を始めたのが二回生のときです。やがて歴史教育への関心は韓国の文化や社会そのものへの関心に転じ、その道の研究者を志すようになりました。

いつも大学院進学のことしか念頭にならぬ学生でしたが、先生方も友人たちもそんな私を許容し、応援してくれたことに感謝しています。

## 奈良教育大学で学んだこと

誰に、何を、どう伝えるか。そのことが常に「小学生」を設定値として考え、議論し、教材研究等での演習を通じて問われ続けた点でした。この軸足さえブレなければ、大学の講義、学会発表から論著の執筆に至るまで、その効力は万般にわたります。狙いを絞って授業を論理的に組み立てていく学習指導案作りも、発問、比喩、時には雑談等も駆使し、相手の視線から伝えるべきことを伝えるための形式として、これまでの研究活動に生かされてきたと感じます。知の最先端に行く人々と身近に接する日常は刺激に満ちている反面、常に世界水準の成果を求められる職場環境は自分の身の丈に合わないのでは？と悩むことも度々です。でも母校で学んだ「伝え方の極意」は私だけの強みとして「奈良教育大学卒」の履歴に密かな誇りを抱きながら、私も知の最先端で奮闘していきたいと考えています。



研究所主催公開講座での講演

# ひと・あれ・これ

## 子どもたちの 笑顔は最高

奈良市立図書館 司書  
西 郁代  
(平成15年3月 教育学部卒)

### 本と子どもたち

児童室にいますと、毎日いろんな子どもたちに出会えます。「こんな本見つけた」と教えてくれる子がいたら、関連づけて「こんな本はどう？」と話しかけます。一緒に座って読んだりもします。「おはなし！おはなし！」と言って、おはなしの時間を楽しみにしてやってくる子がいたり、探していた本を見つけて「あつた！」とうれしそうに叫んでいる子がいたり、どの子どもたちも顔が輝いています。「前に読んだ本で、書名はわからないけれど、こういうお話の本はありますか？」という問い合わせもよくあります。少ない手がかりの中から、その本を見つけ出し、お伝えできた時はうれしいものです。たった本一冊で、こんなにも盛り上がれるなんて、素晴らしいなと思うことが多々あります。

### 夢がかなって

小学校から、子どもたちが図書館見学に来られます。反対に、こちらから小学校を訪問することもあります。紹介した



## 留学生レポート

# 留学を振り返って

学校教育教員養成課程教育・発達基礎コース 4回生

久米 知世

from USA

### アメリカの授業

大学では、さすがアメリカだなあと感じる授業がばかりでした。アメリカ人20人くらいに話しかけてアンケートをとり、母国との違いを述べるといったエッセイの課題や、動物保護施設やホームレスの方のための施設での食事配膳等のボランティアの授業を経験しました。美術の授業では、2つの映画のワンシーンを構成して新たな場面を描いたり、自分の部屋を描いたり、課題のすべてが魅力的で大変楽しかったです。批評会では自分の考えをクラスメイトに説明し、それに対し、何人もわたったことのない感覚を覚えました。もちろん、こんな風に授業を楽しむためには、日々の会話での苦勞や、多過ぎ大き過ぎるカルチャーショックを乗り越えた過程を抜かすことはできません。今思うと日常生活でさえも、私を成長させてくれた授業のような学びの場だったといえます。

### 新しい目標

今、私は二つの国の好きなところ、合わないところを受け止めて、自分なりの過ごし方を探しています。どちらのいいところもこれからの自分に生かし、素敵な大人になつていきたいと思えます。また、留学中自分が困っていたことやその時の心境を忘れずに、日本にいる外国人の方々にも少しでも協力していければと思っています。下級生の皆さんも、自分から困難なことに挑戦して、新しい目標を見つけてほしいと思います。



パーティーの様子(筆者上左端)

## 留学生レポート

# 日本での留学生活

総合教育課程環境教育コース 1回生

ソロンガ

from China

桜が咲き、いつもの春と変わりのない2005年の4月。寒い冬が過ぎて、暖かく美しい春を迎えた瞬間でもあり、皆は桜の美しさを楽しんでいたかも知れませんが、来日したばかりの私には、異国での寂しさ、寒さが何とも言えないほど伝わってきました。「これか何が起るのだろうか」という不安を感じながら、日本での留学生活が始まりました。それから日本語の勉強に励み、少しずつ上達しながら、目標を目指して頑張るようになった私。頑張った甲斐あって、半年前に奈良教育大学に受かり、今は環境教育コースで地域環境について学んでいます。もちろん、大学ともなると勉強する内容も深くなり、範囲も広がります。日本語の勉強は当然ですが、自分の専修の科目にも力を入れ、日本人学生についていかなければならない、ということには十分覚悟していました。しかし、思いも寄らなかったのは、留学生だけの環境から日本人学生の中に入ったことでした。簡単な自己紹介から始まり、まだ全然慣れない

いうちに合宿で吉野山へ行くことになり、桜の名所が満開の時期だったのに、私にはそれを楽しむ気持ちより、「たった一人の留学生だ」という思いの方が強かったのです。心配と不安でどうしても表情が硬くなる私に、日本人の学生たちは「留学生の方ですか」「お国は」といろいろ質問をしてくれて、皆と自然にコミュニケーションが取れるようになりました。そればかりではなく、山一杯の桜の美しさもさることながら、咲いてすぐ散ってしまう短い命に心を打たれ、なんとなく力強くなった気がします。今までの半年間は、私にとって大学生活に慣れるための期間だと言っても良いと思います。わからないことや困ったことにもありますが、先生方やクラスメイトたちに助けってもらい、そのおかげで今、大学生活を楽しんでいます。



神戸旅行にて友人たちと(筆者左端)

勉強以外でも、学校側のいろいろな留学生イベントにも参加し、みんなと船に乗ったり、工場見学に行ったりして、本からでは学ぶことができない幅広い知識に触れることができ、貴重な体験になったと思います。来日してから3年が過ぎましたが、振り返ってみるとあつという間でした。嬉しいこともあれば、辛いこともありました。しかし、この3年間は私のかけがえのない経験となり、人生を豊かにしただけではなく、私を成長させて、強くしてくれました。ここまで進むことができ、今、感謝の気持ちで大学生活を楽しんでいます。これからは目標のため、「雨にも負けず、風にも負けず」という言葉を座右の銘にして、頑張りたいと思います。